

住民参加方式で

ゴミ及びし尿処理場を建設

現在のゴミやし尿の一般廃棄物処理施設は昭和四十年七月に大月市と都留市で一部事務組合を組織して、し尿とゴミを処理しているものであります。

その規模と運営の現況は、し尿処理施設が昭和四十二年に消化方式で一日六〇キロリットルの処理能力のものが作られ、これに對し現在一日七〇キロリットルの過剰投入でどうにか処理しており、設備も不備で悪臭対策・排水対策も充分でなく地域からも、漁業組合からも苦情が絶えない状況にあり

ます。

なお、施設全体が老朽化しており、浄化槽汚泥の投入率が多くなっている現在ではその対応が困難な施設となっております。

ゴミ処理においては一日十五トンと二〇トン処理する旧式な直投式のバッチ炉が田野倉と玉川にあり一日平均四〇トン程度を処理していますが、厨芥類が多くゴミ質が悪いため充分な焼却が出来ず、重油で助燃しているがなお不充分のため、パイ煙対策など無視して塵タイヤを加えて焼却しており、

再任のあいさつ

教育長 内藤 盈成



一九八一年の輝かしい新春とともに、教育長に三たび任命をいただき、身のしまる思いがいたします。これからの地球社会は、科学技術の進歩と発達により、急速に小さく狭くなり、国際相互依存度が高まっています。

今年は、生活態度・生活習慣を

全くこの面で申し開きの出来ない状態にあります。

このような公害への対応や組合の姿勢に對し、地域住民の感情の悪化は当然であり六年前から移設運動の起ったことは当然の理であります。

また、ゴミ・し尿の両施設が都留市にあるので、一方のゴミ処理だけでも大月市へという形で移設運動が展開され、大月市において数カ所候補地をあげ交渉してきましたが、大月市は地形に恵まれず、無理して焼却施設を建設しても建設費も高く、管理運営上にも問題が多いので難行し、都留市で再び検討することとなりました。しかし、このような廃棄物処理施設は、

更に培い、人類社会の行き詰りを打開し、平和共存社会を築き上げる努力を教育課題として取り組みたいと思います。

さて、都留市政の大きな柱となつております文教都市の実現は、六十一年山梨国体を機に全市民心を一にして取り組み、その成果を広く県外の方々に評価をしていただくチャンスであります。都留市が誇りとする文科大学を軸に、あらゆる教育の環境を充実させ、より優れた文教都市づくりを推進しなければなりません。

この恵まれた山紫水明の自然環境は、古き先人の古都に愛着を持った良識が完全に継承され、持続されてきた尊い宝であります。こ



市長に答申する田野倉地区環境整備協議会委員長

総ての家庭に台所もトイレも必要であるように、この処理場も自治体行政に当然必要不可欠のものであることのご理解は頂けても、その設置についてはイメージ的の公害意識が先行して、その同意が得られず実現はむずかしいものであります。

市はこのような実態を解決するため相当長い期間、その手法を模索しましたがまず不信の念がもたれている行政の信頼を回復することが先決であると理解して、今までのような説明や繕いことはやめ、既述のような実態を訴えることとし、諸条件が最も適している現在の田野倉地区に意向打診を行ない「地域からの発想を重視する」ことで協議の場がもたれるようになります。

協議会委員は地域の市議会議員をはじめ自治会長・農業委員・常

会長など地域を代弁するにふさわしい人達二十五人にお願いし、「田野倉地区環境整備協議会」として発足し、地域住民相互の好ましい触れ合いの中で物心両面にわたるきめ細かい環境づくりを自然との調和をはかりながら地区民の自主的参画によって展開しようとして合せ、地区民の連帯感の高揚とともに快適で安全な生活環境を作ろうという姿勢で土地利用、道路交通網など十項目の検討を十数夜続きました。

こうした中で現存するゴミ及びし尿の処理施設はどこへ行ってもさらわれて、その実現には日時を要するのみ、このままでは環境は整備されない、との判断が出され「現在地において抜本的な整備を容認しよう」との答申がいただけたのであります。

ことにゴミ及びし尿の両施設の整備を考慮されたことについては全市民的評価に値するものと思えます。このほか答申には地域から市に對し八つの提言があり、その一つに廃棄物処理施設の建設に係る諸条件の整備及び管理運営の全てに都留市がその責任を負うべきである。とありますので、より完全な施設として、その使命が遂行されるよう立派な施設を仕上げることを誓い、早速昭和五十六年度から年次的に着手いたしますので、市民各位の全面的なご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。